

～ウィーン日本人学校に勤務して～

前ウィーン日本人学校

現美唄市立西美唄小学校 福士 晶知

1. はじめに



平成17年度から平成19年度までの3年間、在外教育施設派遣教員としてオーストリア・ウィーン日本人学校に勤務した。

平成17年4月6日水曜日、11時過ぎに飛行機はウィーンへ向けて出発。約12時間の飛行を経てウィーン・シュベヒャート空港に到着した。

気温23度。簡単な挨拶をしてタクシーで自宅へ向かった。向かう途中の車の中で、お世話をしてくださる3年目の先生と打ち合わせ。明日の予定や週末の予定、車の購入の件など次々と説明され、旅行ではないことを実感した。

事故のため高速が止まっているので一般道で行ったが思ったより時間がかかった。市内まで約1時間。北海道とは違うクネクネ道と暑いぐらいの気温、さらにタクシー運転手の運転が荒く、子どもたちと妻は車酔い。上の子は自分でエチケット袋を持ってがんばっていたが、暑さでのぼせ鼻血まで出た。妻は後部座席で伏せたまま起きあがれず……。これから住むというアパートの入り口に到着したときにはしばらく動けなかった。何とか部屋に入り、全員で寝室

へ直行。到着早々、暑さのためか子どもたちは寝室でもベッドに鼻血をべっとりつける。そんな波乱の赴任だった。それから約3年間の経験したウィーン日本人学校やオーストリアの様子や生活について簡単に紹介したい。

2. 現地の様子

①オーストリアの概要



ウィーンと聞いて、何を連想するだろうか？音楽の都？ウィーン少年合唱団？芸術の都？それとも、ドナウ川？誰でも一度は聞いたことのある地名だと思うが、詳しくはよく知らないという方が多いのではないかな。私も派遣前はそのような中の一人だった。そこで、まずオーストリアやウィーンについて紹介したい。ウィーンは、オーストリア共和国の首都である。オーストリア共和国は、ヨーロッパのほぼ中央にあり、8つの国々と国境をもち、9つの州で構成されている。国土は日本の約4分の1。北海道と同じぐらいの広さである。西部一帯には、アルプスの雄大な山々が連なり、東部には「蒼きドナウ」で有名なドナウ川が悠々と流れる、山と川の美しい国だ。第2次世界大戦後、オーストリ

アは永世中立国としてスタートした。と同時にウィーンは、ニューヨーク、ジュネーブに続く、第3の国連都市として、国際原子力機関（IAEA）、国連工業開発機構（UNIDO）などの機関も置かれている。1995年には、EU（欧州連合）にも加盟し、ヨーロッパ諸国との連携を強めてきている。公用語はドイツ語。また、宗教はカトリックがほとんど。通貨はユーロを使っている。ドイツ語の発音では、ユーロを「オイロ」と言い、最初は違和感があった。オーストリア共和国全体では、人口が約830万人。ウィーンの人口は、2007年現在で、約167万人となっている。

②ウィーン市内について

ウィーン市は23区からなり、ドナウ川の南西に1区から20区までがあり、北東に21区と22区がある。



22区には、国連都市（UNO city）があり、高層のアパートが建ち並んでいる。



町の中心にあるシュテファン寺院

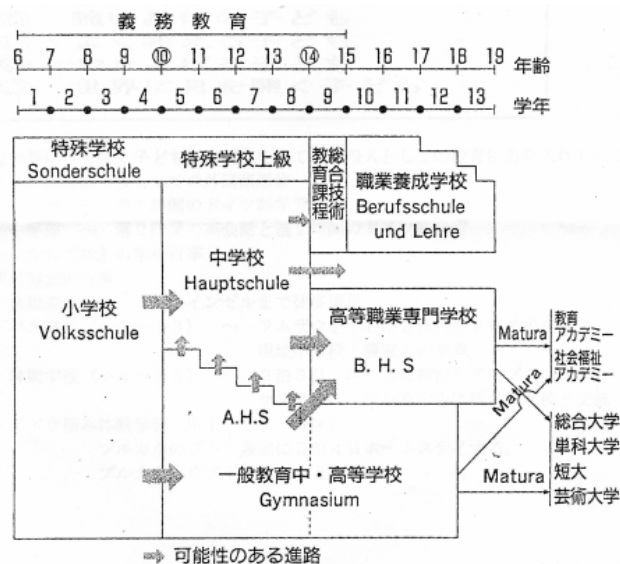
また、ドナウ川の南西にはドナウ運河があり、今でも商業船や観光遊覧船が行き交っている。そして市の中心に1区があり、リンクと呼ばれている環状線に囲まれ、その中心にシュテファン寺院が建っている。このシュテファン寺院より高い建物を建てることは禁止されており、1区を中心とした旧市街地区は世界遺産にも登録されている。

ドナウ川の北東には、アルテドナウと呼ばれる三日月湖があり、夏はヨットや水遊び、冬はスケートと市民の憩いの場となっている。

③オーストリアの教育

オーストリアの義務教育は9年間で、6歳になると4年制のフォルクスシューレ（小学校）に入学する。10歳で卒業すると、ギムナジウム（8年制の一般教育を行う中・高等学校）かハウプトシューレ（4年制の中学校）などに進学する。

ギムナジウムは5年目までが義務教育で、卒業前に実施されるマトゥーラ（大学入学資格試験）に合格すれば大学に進学できる。大学別の入試はなく、マトゥーラを取れば進学できる。ハウプトシューレに進学した生徒は、修了後、一般教育中・高等学校へ進学か、高等職業専門学校に入学するか、総合技術教育課程を経て職業要請学校へ進学する。高等職業専門学校と一般教育中・高等学校へ進学した生徒にはマトゥーラの受験資格が与えられ、大学へ進む道も開かれている。（下図・参照）



④オーストリアの子どもたちの生活

オーストリアの小学生はフォルクスシューレという小学校に通っている。1年生から4年生までの4年間の小学校生活。学校の名前は全てフォルクスシューレ。そのため、日本のように

「〇〇小学校」という固有の学校名がない。各学校の名前は、学校の前の通り名をつけて区別しているようだった。

小学生の学校生活は毎日、午前授業。13歳までは子ども一人での通学は認められていないの



で、保護者が送り迎えをする。給食はない。そのため、12時過ぎには下校となる。午後からは音楽やスポーツなど、自分の打ち込める学校に行ったり、フォルクスシューレでの勉強を更に補習する学校（午後の支援学校）などに通っている子どもたちもいる。このような子どもたちの為に公共交通機関では、「午後の定期」という定期券を発行して、子どもたちが利用しやすいようなシステムになっている。この定期券で、地下鉄・バス・市電・国鉄どれでも乗ることができる。

新学期は9月1日から始まり、終業式は6月下旬。7～8月はバカンスとなり休みとなる。オーストリアでは、小学4年生の10歳で自分の将来を選択しなければならない人生の岐路に立たされるため、私が赴任している間も「進路決定が、早すぎるのでは・・・」と新聞で話題になっていた。

一方、私立学校には日本人学校や国際学校・インターナショナルスクールがある。特に国連がある関係からインターナショナルスクールは3校と充実し、世界各国の子どもたちが通学している。ウィーン日本人学校の隣にもインターナショナルスクールがあり、日本人も通っていた。アジア圏では韓国や中国の子どもたちが通学する姿が多く見られた。学費は年間200万円くらいと非常に高額である。

3. ウィーン日本人学校の教育

ウィーン日本人学校は、1978年の9月に

開校した。始めは19区のシーベリンガーシュトラッセの元貴族の屋敷を改装した校舎だった。しかし、1992年に現在の22区の校舎に移転した。開校当時34名だった児童生徒数は、最盛期の1992年には120名を越えたが、バブル崩壊後は減少し続け現在は30～40名ほどで安定している。

学年	男子	女子	合計
小1	3	1	4
小2	4	5	9
小3	1	3	4
小4	3	5	8
小5	2	2	4
小6	2	1	3
中1	1	2	3
中2	3	0	3
中3	3	1	4
合計	22名	20名	44名

(平成20年度の在籍児童数)

①ウィーン日本人学校の役割

『オーストリアに在住する日本人子弟および、他国籍者であっても本校に就学を希望するものに対して、日本国憲法および学校法令に基づき、現地文化及び現地教育を積極的に吸収しながら、格調高い初等・中等教育を施すこと』を教育目的とし、豊かな人間性と強くて健康な体を有し、自主性・創造性および国際性を身につけた児童・生徒を育成する役割を担っている。

②どんな生活？

ウィーン日本人学校の授業は、すべて日本語でおこなわれている。各学年1クラスで、少人数の利点を生かし一人ひとりにきめ細やかな対応を行っている。日本の教科書を使い、学習する内容も日本とまったく同じ。日本と同じ教科

の他にネイティブな現地在住の講師によるドイツ語や英会話の授業も行われている。4月に1学期が始まり、夏休み・2学期・冬休み・3学期と日本と同じく年度単位で1年を過ごす。完全週5日制なので土・日は休みとなる。更にオーストリアの祝・祭日も休みになる。ほとんどの子どもたちはスクールバスを利用し、8時20分過ぎに登校、16時に下校する。(但し水曜日は15時15分に下校)

③教育の特色

「ウィーンならではの教育」を柱に、公民館での「学芸会」、ラッケンホフでの3泊4日の「全校スキー教室」など、行事を数多く実施している。また5月に行う「新緑大運動会」は、中学部が交流しているプルカウ地区の現地の子どもたちも参加したり、地元の子どもたちが参加できる種目があったりと、国際色豊かな運動会となっている。

学年	月	火	水	木	金	週時数
小1年	5	6	5	5	5	26
小2年	5	6	5	6	5	27
小3年	6	6	6	6	7	31
小4年	6	6	6	6	7	31
小5年	6	6	6	7	7	32
小6年	6	6	6	7	7	32
中学部	6	7	6	7	7	33

(平成20年度の授業時間数)

2000年度より、小学部1年から英会話を教育課程に位置づけ、英会話講師3名、ドイツ語講師2名が週2時間のドイツ語・英会話などの語学活動にも力を入れている。また世界の第一線で活躍している保護者の協力を得て、「進路講話会」や「外部講師の話聞く会」を学年に応じて実施し、世界の中から日本を見つめる機会を得ている。ITの活用も進み、学校からの通知はほとんどEメールで行っている。職員会議も基本的には机上のパソコンディスプレイで行い、決定したことをプリントして配布し、用紙の節約を行っている。

特色(1) <日本人としての教育>

- 日本国の学習指導要領を踏まえた教育課程の編成 日本国の教科書を使い、学習する内容もまったく同じ。日本に帰国しても、すぐに対応できるように指導。
- ・各教科、道徳、特別活動の標準時間以上の実施 (授業日数200日確保)
 - ・45分間授業 学年により7校時授業の実施
 - ・各学年1クラス、少人数の利点を生かし一人一人に応じたきめ細かな学習指導
 - ・専門家による音楽の授業

特色(2) <教科指導>

- ① オーストリア国の認可校としての外国語履修
 - 小学部: 週2時間のドイツ語・週2時間の英会話 (1・2年生は週1時間の英会話)
 - 中学部: 週4時間の英語と週2時間の英会話 (計6時間) <日本より2~3時間増>
 - 週2時間のドイツ語
 - 英語検定の実施 (年2回)
 - 漢字検定の実施 (年3回)
 - 算数・数学検定の実施 (年2回)
 - ドイツ語検定(年1回)
- ② 校外学習: 自分の目で見て、自分の肌で感じての「直接体験」から学ぶ
 - 生活科・総合的な学習・社会科・理科・国語科等の授業で活用

特色(3) <行事>

- ・歴史の都の街を描く全校写生会
- ・ウィーンフィル鑑賞などの音楽鑑賞教室や美術鑑賞教室
- ・宿泊学習(2泊3日)・全校スキー教室(3泊4日)
- ・世界遺産の中にある動物園への小学部遠足
- ・PTA主催の七夕コンサート鑑賞

特色(4) <交流活動>

- ・プルカウ校訪問(小5・6・中学部)
- ・21・22区フォルクスシューレとの交流 (小学部1~4)
- ・VIS(Vienna International School)との交流(中学部)
- ・AIS(American International School)との交流 (中学部)
- ・運動会への招待(プルカウ校)

特色(5) <開かれた学校をめざして>

地域に出での「日本文化の紹介」

- ・ 世田谷公園祭りへのアトラクション参加
- ・ ドナウインゼル「桜の森」での日澳交流
- ・ 国連バザーの「子供による各国紹介」
- ・ 邦人社会の一員として「クリスマス会のアトラクション」参加
- ・ 運動会・学芸会へ、保護者・日本人会員及び邦人を招待
- ・ 保護者・日本人会員及び邦人への図書館の開放
- ・ 学校開放事業(料理教室・日本人会ソフトボール大会練習場に校庭開放)

特色(6) <国際人としての教育>

現地理解教育

ウィーンならではの教育と題し、「地の利を生かした国際理解教育」の観点に立った現地理解教育を行っている。



○桜の森交流会

オーストリア建国1千年(1996年)を記念して、日本から桜が1000本贈られた。その多くがドナウインゼルという場所に植えられており、毎年、桜の季節には「ドナウインゼル」で桜の森交流会というイベントが行われている。

ウィーン日本人学校の児童生徒もそこに出かけ、日本とオーストリアとの架け橋となるような活動を毎年行っている。2007年度は、交流行事の中で「ソーラン節」の披露や「さくら」「よるこびの歌」の合唱を行い、交流会を盛り上げた。



○大運動会

運動会は、「新緑大運動会」と名付けられている。美しい新緑の運動場で、児童生徒、保護者、現地日本人会の方々、飛び入り参加の方々も交え、様々な競技やイベントを行う。

学校間で交流をしている現地の公立学校「プルカウ校」の生徒達も参加し、国際的な雰囲気になった楽しい運動会となっている。



○ドイツ語を使った校外学習

オーストリアの母国語はドイツ語。日本人学校では、毎週2時間のドイツ語の授業が行われている。そのドイツ語学習の発表・発展の場として、現地のショッピングセンターに買い物に出かけたり、現地の施設見学に出かけたりする。

簡単なあいさつから始まり、自己紹介や買い物の仕方など、現地の人との交流ができるくらいの会話力を身につけることをねらいとしている。



○全校写生会

日本人学校では、毎年8月後半に、ウィーン市内の名所、旧跡を全校で訪れ、「全校写生会」を行っている。

昨年度は、フォルクス庭園・ホーフブルク王宮周にかけた。公園に散歩に来ていた現地の人や、観光客に声をかけられ、ドイツ語や英語を使って交流をする姿も見られ、まさにウィーンならではの素晴らしい体験になった。



○クリスマスマルクト見学

12月になると、ウィーンの市庁舎(市役所)前やシェーンブルン宮殿で、クリスマスマルクトが開かれる。ここでは、クリスマスを祝う準備をするために、クリスマス用品の市が開催される。

かわいい飾り、神秘的な飾りをはじめ、クリスマスの雰囲気がつっぷりと楽しめる。

日本人学校の児童生徒も、ドイツ語の校外学習の一環として、また、現地理解教育の一環として、毎年ここへ出かける。また、この時期には、美術鑑賞教室(小5・6・中学部)やクラフト体験教室(小学部)も行い、芸術の都「ウィーン」を堪能する。



○全校スキー教室

1月には全校児童生徒が、アルプス山脈の東にあるLackenhof(ラッケンホフ)スキー場でスキー教室を行う。3泊4日の日程で行うこのスキー教室は、技能別のクラスに分かれて本場のスキースクールコーチの教わりながらスキーを行う。ゲレンデのすぐそばにある宿舎に宿泊し、縦割り班で集団生活をするため、上学年の生徒は下学年の児童の面倒を見ることで思いやりの心が育まれ、下学年の児童は親元を離れて生活することで自立心を養っている。中学生から小学生までみんな仲のよいウィーン日本人学校だからできる行事となっている。

④日本の学校と違うこと・・・

日本の学校と違うことは、小学1年生からドイツ語・英会話の授業が行われていることである。オーストリアの法律で、「ドイツ語は週2時間が必修」となっている。そのため、小学1年生から中学3年生まで1週間に2時間のドイツ語の時間が設定されている。

次に、ほとんどの子どもたちがスクールバス登校である。ウィーン市内に1校しかないので、学校からの距離が遠く、自宅に帰ると友達のお家に遊びに行くことができないうらい各自宅が離れている。そのため、朝は7時過ぎのバスに乗車し、約1時間かけて通学する子どももいる。帰りも同様である。そのため、2時間目の休み時間に副食（果物やおやつ）の時間が設定されている。下校バスは16時発なので、小学1年生も16時前まで学校で遊んでいる。1年生から6時間があることも日本とは違う。

また、給食は無く、毎日お弁当を持参しなければならない。給食センターも無ければ、給食室もないので子どもたち・職員は毎日昼食時間は弁当を食べる。飲み物も毎日持参。そのため、最初の頃は「給食の時間だよ。」と話すと、「先

生、お弁当の時間です・・・。」と何度も訂正された。給食を経験したことがない子どもたちも多かった。

保護者の方は毎日朝5時過ぎに起きて弁当を作っていた。我が家は昨年、私の分を含め3人分の弁当を作り「毎日、大変。」と話していた。

校内では小学生と中学生が同じ校舎で勉強している。日本では小中併置校はなかなか見られない。そのような中で小学1年生から中学3年生までと一緒に生活している。そのため、中学生は小学生の面倒をよく見てくれた。

授業は小学生から教科担任制となっている。特に小学4年生から教科担任制となっており、各教科の担当の先生が全て違う。私は1年目、小学2年生の担任でありながら、中学3年生の社会・中学美術・小5・6図工の担当だった。2年目は小学4年生の担任で中学3年社会・小6社会の担当。そして、3年目は小学2年生の担任と小4年生の算数の担当した。

4. ウィーン日本人学校での教育実践

①派遣前に力を入れてきたこと

派遣前の美唄市立西美唄小学校勤務の時からITを活用した授業や交流学习の実践に力を入れてきた。異国の地で子どもたちのために自分ができることは何かと考えたときに、ITを使った「わかる授業・楽しい授業」に取り組み、確かな学力をつけることが自分の役割と考え実践を積んできた。

②異国の地という環境

日本国内と違い学校の外を出るとほとんどがドイツ語という環境だ。そのため、日本語に触れる機会も日本にいる以上に少ない。ラジオやテレビもドイツ語や英語ばかり。書籍も手に入らない。唯一、NHKを中心とした日本語の衛星放送があったが、有料で値段も高いため加入している家庭は半分くらい。更に家庭生活でも日本人との交流が少なく、家族の中での会話が中心となる。在住日本人も少ないため、日本語

を駆使して伝えるという活動は非常に大切な活動であった。そのような中で活かされたのが、複式を受け持った時の教科リーダーによる授業だった。フォーマルとインフォーマルな話し方を使い分けさせた。その話し方が集会活動や来客の時の対応で活かされていた。

私自身3年間日本語に触れる機会が少なくなっており、学級通信の文章などで表現が怪しくなることがあった。自分自身を文章力を維持するために毎日、日記の記録を続けた。

③授業における具体的な取り組み

- 教科：実物投影機・プロジェクターを活用した授業
- 教科：デジタル教材を活用
- 交流：web型の学級日誌を利用し、日本の学校と交流
交流相手校：西美唄小学校・鳥取の小学校
- 交流：教育用ソフトを活用した徳島の学校との交流
- 交流：現地の学校と共同学習「まち探検」

ITを活用した授業

教師・子どもそれぞれがITを活用して授業に取り組んだ。教科書を大きく写して授業を行ったり、子どもの発表の場で作品を大きく写しながら発表を行わせた。赴任している3年間にプロジェクターやスクリーンを複数購入し、職員全体にITを活用した授業を広めることができた。更にパソコンとプロジェクターを連動させることで、行事の写真や動画を提示しながら行事をふり返り、作文などに活かした。



現地の学校と共同学習「まち探検」

現地のフォルクスシューレと共同学習に取り組んだ。今までの交流は1年間に2回。お互いの学校を訪問し、自分の文化を紹介し合う程度の交流だった。そのような交流から、更に深い交流に進めるため交流相手校を新しく探した。すると東京都の荒川区と姉妹都市を結び、荒川区の学校と絵や習字を交流している学校があり、早速交流を申し込んだ。すると、相手校も日本の学校について興味をもってくれ生活科・社会科のまち探検を合同で行い、ウィーンの町の紹介ビデオを作成した。

デジタル教材を活用

デジタル教材を活用して授業を行った。国語のデジタル教科書を用いて授業を行ったり、NHKのデジタル教材を活用したりした。NHKの学校放送番組を利用した授業では、特に道徳・総合の番組はうれしそうに見ていた。日本のテレビを見る機会が少ない子どもたちにとって、番組を使った授業は、子どもたちの意欲を高めていた。

【利用したデジタル教材・番組】

- 国語：国語のデジタル教科書（光村図書）
 社会：にんげん日本史（小6）<http://www.nhk.or.jp/rekishi/>
 :地球データマップ（中3）
<http://www.nhk.or.jp/datamap/>
 道徳：バケルノ小学校（小2）<http://www.nhk.or.jp/bake/>
 :さわやか3組（小4）<http://www.nhk.or.jp/3kumi/>
 英会話：えいごりあん（小2）
<http://www.nhk.or.jp/eigorian3/ja/frame.html>

web型の学級日誌で交流

パソコンで記録する学級日誌を使って、毎日の生活を記録させた。特に最初はタイピングのスキルも身に付いていないため、学活などの時間を利用してタイピングスキルを鍛えた。その後、日誌を記録することでスキルを高め、交流へとつなげた。1年生から英会話の授業が行われているためローマ字入力にもスムーズに取り組むことができた。パソコンで記録する学級日誌には、メッセージのやりとりができる機能がついており、同じソフトを使っている日本の小学校とメッセージの交換ができ、日本で流行していることなど生活一般の話題から、社会科や生活科に関連した交流を行うなど日本の小学校の友達と交流することができた。特に鳥取の小学校とは「ニュース番組を実際に作り、DVDにして送り、感想メッセージのやりとりを行った。日本語の言語環境が乏しいため、日本の学校と交流することで日本語力のアップを図った。
 ★キーボー島：<http://kb-kentei.net/>

④自分の力を維持する

ウィーン滞在中の3年間は今まで自分が築き上げてきた力を出し切っていく場だった。研修会に参加するなどの機会が無く、年数を重ねる毎に自分の力を維持していくことが困難だと感じた。特に2年目・3年目は研究主任となったことで、教職員の力を高めるための研修を取り入れた。ウィーンでも各先生方が自分の力を発揮・維持していくために必要な研修を行った。

〈自分の力を維持するための取り組み〉

- 研究主任としての研修の推進
- 関西大学・宮崎大学の先生による講演
 - ・ P I S A型学力について
 - ・ 異国の地で評価はどうあるべきか
- 語学講師への研修

- ・日本人学校の外国語の活動の方向性
- ワークショップを取り入れた研修
- 原稿執筆（個人）
 - ・情報モラルに関わる原稿執筆
 - ・教育ソフトを活用し実践報告

大学の先生による講演

研究主任となった2年目・3年目は大学の先生を招いて校内研修の場で講演を行っていた。2年目は、宮崎大学の先生に「PISA型学力について」の講演。



日本国内でも全国学力テストが導入された1年目。PISA型学力テストで日本の順位が下がったことを背景に導入されたが、「いったいPISA型学力とは何だ？」という職員の疑問の解消を図るために行った。

3年目は関西大学の先生に「異国の地での評価」について講演。保護者に公開できる評価とは。評価の方法などの講演を行っていただいた。このような講演の機会は、派遣以前のつながりにより行うことができた。オーストラリアやドイツで研究を行っている時間の合間に学校へ来ていただき講演をしていただいた。

日々の仕事に忙殺される中、自分の力を高めるための研修は全職員の意欲を向上させたように思う。

2年次・・・宮崎大学 中山迅先生

「PISA型学力とは・・・」

3年次・・・関西大学 黒上晴夫先生

「異国の地で評価はどうあるべきか？」

語学講師への研修

ドイツ語・英会話の講師への研修も行った。現地に在住した方ではあるが、実際に子どもたちへ指導を行っていた方も少なく、語学活動のあり方についての研修を行った。

私自身、派遣前にカナダのアルバータ州立大学でのESL研修に参加し、第2言語としての語学を習得する方法を学んできた。更に北海道の小学校英語活動の手引き書を北海道立教育研究所と共同で作成した。そのノウハウを活かして研修をデザインした。

語学活動では教材の活用が非常に重要であり、教材なしでは子どもたちの集中力は持続しない。教材活用の工夫やアクティビティーの構成などの研修を行った。

その結果、講師の意識改革にもつながり、語学授業の活性化を図ることができ、子ども達にも楽しい授業となった。

目は「バトンタッチを意識して」と自分の中でのテーマが違った。1年目は学校の様子もわからず、2年目・3年目の方に校務分掌は任せっきりだった。分掌の仕事も少なく、授業に専念できた。2年目になると研究主任・生徒会・3泊4日のスキー教室と自分の役割が一気に増えた。そして3年目。研究主任・児童会・スクールバス担当・学籍・運動会など授業以外での仕事も多く担当した。その中で常に議論の中心となったことが「子どもたちのために」ということだった。職員の入れ替わりが早い中、次の先生に引き継いでいくことの大切さを実感した。変えていくことも大事だが、今までの流れも大切していかなければならない。やる気とアイデアをどのように教育活動に取り入れていくかという工夫の部分が大変だと感じた。

任務を果たせたと実感

3年目の夏休みに卒業生が学校へ遊びに来た。高校生の彼は、私が1年目に中学3年生の社会を受け持っていた生徒だった。「将来、国連職員になりたい。そのため、大学の進学先を迷っている。」と話していた。きっかけは、中学3年生の公民の授業で学んだ国境なき医師団の学習だそうだ。それ以来、高校でも「国連職員になりたい。」という思いで学習を続けていたらしい。大学の進学先まではわからなかったので、「高校の担任の先生に相談してみて。」とアドバイスした。その生徒が学校をあとにした後、「自分の実践が少しでも子どもたちのためになった。」と実感した。

終わりに

3年間をふり返ると「1年目は授業に集中」。2年目は「校務分掌でリーダーシップを」。3年